『源氏物語』の落葉宮
――死者との一体化願望――

塩見　優

［キーワード：①源氏物語　②落葉宮　③一条御息所　④死　⑤母娘］

はじめに

落葉宮についての研究は、夕霧との関係に注目したものや、皇女という存在であることに注目したものが多い。また、母、一条御息所との関係を論じられることもある。

この二人の母娘関係について鈴木裕子は、娘の人生を管理し、「所有」しようとする母であるとし、身分の低い一条御息所は皇女としての聖性を持つ娘の人生を我が人生として生き直そうとしたのではないかとする。(1)また、大軒史子は一条御息所と落葉宮との間に隠し事がないことの異常性を指摘している。(2)様々な方向から論じられる母娘関係であるが、これらの論は主に生きている一条御息所と落葉宮の関係について論じられることが多く、死後の一条御息所と落葉宮の関係について論じているものは多くはない。この死後の母娘関係も重要

なのではないだろうか。

一方、一条御息所の死については、金賢貞が「物の怪」の存在と結びつけ、人の心が生み出す物の怪を筆者、紫式部が読者に示すために描いたと位置付ける。[3] だが、これは「物の怪」に注目したものであり、一条御息所の死後の母娘関係に目を向けたものではない。

夕霧巻はその大半を使用し、一条御息所の葬送、法事、そして残された落葉宮の悲しみを描いている。もちろん物語の大筋は夕霧との恋物語であるため、夕霧と落葉宮の関係性が重要だともいえるであろう。だが、そのきっかけとなるのは柏木の死であり、母一条御息所の死である。小池清治は、柏木の死と母一条御息所の死が夕霧と落葉宮の物語を動かす原動力となっているとし、『源氏物語』における「死」による物語の展開を指摘する。[4] 物語の背後に常に潜み続ける母の死、そしてそれを見つめる娘落葉宮、その両者の関係を考えずして、一条御息所の死を考えることは不可能だと思われる。

本論文では、一条御息所の死に関わる用語、落葉宮の心情について分析をしていきたい。『源氏物語』は葵上、紫上などといった夫婦関係にある人物の死に注目されることが多いが、その一方で桐壺更衣と光源氏、桐壺更衣と母北の方、八宮と宇治の姉妹と親子間での死も多く描かれている。『源氏物語』が描く親子の死を考えるための一視点としてこの論を位置付けたい。

一　一条御息所の死

落葉宮の母、一条御息所は、夕霧と落葉宮が恋仲にあるかもしれないことを悲嘆し、人々から娘が好奇の目

で見られるかもしれないことを悩みながら亡くなっていく。この母娘は、一条御息所の死後、語り手に「親と聞こゆとも、いとかくはならはすまじきものなりけり」（夕霧④四四三）と語られるほど仲が良かった。そのため、落葉宮の母死後における悲しみは深い。まず、一条御息所の臨終場面を確認したい。

宮は後れじと思し入りて、つと添ひ臥したまへり。人々参りて、「今は言ふかひなし。いとかう思すとも、限りある道は帰りおはすべきことにもあらず。慕ひきこえたまふとも、いかでか御心にはかなふべき」と、さらなくことわりを聞こえて、「いとゆゆしう。亡き御ためにも罪深きわざなり。今は避らせたまへ」と、引き動かいたてまつれど、すくみたるやうにて、ものもおぼえたまはず。修法の壇こぼちてほろほろと出づるに、さるべきかぎりかたへこそ立ちとまれ、今は限りのさまいと悲しう心細し。（夕霧④四三八）

死者一条御息所に「後れじ」と落葉宮は「つと添ひ臥す」のであった。「つと」という語を考えれば、おそらくぴったりと横にくっつくように添い臥したのであろう。その様子は女房たちには「ゆゆし」きものと見なされ、必死に落葉宮を引き離そうとする。加持のために作られた修法の壇も壊され、落葉宮は「いと悲しう心細し」と思うのであった。

『源氏物語』の死の場面に、「後れ」という表現は多く確認できる。例えば、尼君が亡くなった後の若紫のことを思い、「幼きほどに恋ひやすらむ、故御息所に後れたてまつりしなど、はかばかしからねど思ひ出でて」（若紫①二四〇）と光源氏が母を亡くした時の心情を回想する場面で使用されている。その他にも空蟬が夫に先立たれたことを表現するのに「この人にさへ後れて」（関屋②三六三）とあり、柏木の死についても「後れたてまつりては」（柏木④三一二～三一三）などと恋人や親などが死に、残された状況を示す語として使用されている。

しかし、今回のように「後れじ」という語になるとただ先立たれた状況を示すだけのものではないようである。『源氏物語』中に「後れじ」の用例はわずか四例しかない。その例を以下に羅列しよう。

①我も後れじとまどひはべりて、今朝は谷に落ち入りぬとなん見たまへつる　（夕顔①一七六）
②宮は後れじと思し入りて、つと添ひ臥したまへり。　（夕霧④四三八・再掲）
③いかでかは後れじと泣き沈みたまへど、限りある道なりければ、何のかひなし。　（椎本⑤一八九）
④限りと見たてまつりたまひて、中の宮の、後れじと思ひまどひたまへるさまもことわりなり。　（総角⑤三一八）

①は夕顔付きの女房、②は今回の落葉宮の例である。③④は宇治十帖の用例であり、③は八宮に先立たれた宇治姉妹、④は大君に先立たれた中君の例である。動詞「後れ」に打ち消しの助動詞「じ」が接続した「後れじ」は死者に「後れない」という強い決意を示している。そのため、①は「今朝は谷に落ち入りぬ」と今にも自殺しそうな様が描かれているのであろう。②は「添ひ臥し」ているだけであるが、この直後に女房が「ゆゆし」と無理やり引き離しているため自殺しかねない状況に見えたのかもしれない。また③④については、「泣き沈み」、「思ひまどひ」と悲しみに暮れている様だけが描かれている。④はこの直後に「あるにもあらず見えたまふを、例の、さかしき女ばら、今はいとゆゆしきこととひきさけたてまつる」（総角⑤三一八）と落葉宮同様に無理やり死者から引き離されている様が描かれる。その点では、場面描写は落葉宮と似ているともいえよう。

この「後れじ」という表現の確認で重要なことは、①の例に見えるように、自殺をしそうなほどの悲しみを表現すること、また周囲の目からは「ゆゆし」と避けるべき事態であると認識されることだ。ただ悲しむので

はなく、自らも死者になろうとするような、そんな生者の意志が透けて見える表現なのである。その自らも死者になろうとする姿勢が落葉宮の「添ひ臥す」という行動に表れているのではないだろうか。先に確認した④の中君の用例と落葉宮の用例はほとんどの行動、心情が重なっていた。しかし、中君は女房に連れられてすぐに退室してしまう。描写の大半が重なる両者であるが、落葉宮の「添ひ臥す」という行動は中君には見えない。もしかしたら、「添ひ臥」そうとしたのかもしれないが、女房により阻止され、実行に移せなかったのだろう。落葉宮だけが行う「添ひ臥す」行為、それは彼女の死に対する特殊な姿勢である可能性が高い。続いて、「添ひ臥す」という語について確認しておこう。

『源氏物語』に「添ひ臥す」の用例は『源氏物語』中二十三例ある。だが、ほとんどが「物」に寄り掛かる用例であり、人に寄り添う用例は八例しかない。以下、その用例である。

①まづ、この人いかになりぬるぞと思ほす心騒ぎに、身の上も知られたまはず添ひ臥して、「やや」とおどろかしたまへど、（夕顔①一六七）

②御琴を枕にて、もろともに添ひ臥したまへり。（篝火③二五六）

③宮は後れじと思し入りて、つと添ひ臥したまへり。（夕霧④四三八・再掲）

④御かたはらなる短き几帳を、仏の御方にさし隔てて、かりそめに添ひ臥したまへり。（総角⑤二三六）

⑤なごりいとなやましければ、中の宮の臥したまへる奥の方に添ひ臥したまふ。（総角⑤二四一）

⑥ものも言はで、いとど引き入りたまへば、それにつきていと馴れ顔に、半らは内に入りて添ひ臥したまへり。（宿木⑤四二七）

⑦桂姿なる男の、いとかうばしくて添ひ臥したまへるを、例のけしからぬ御さまと思ひよりにけり。

⑧いとをかしげなる男女もろともに添ひ臥したる絵を描きたまひて、「常にかくてあらばや」などのたまふも、涙落ちぬ。（東屋⑥六三）

（浮舟⑥一三一〜一三三）

以上である。今回問題としている落葉宮を除く七例はどれも男と女が寄り添う例となっている。また、①の気絶した夕顔に寄り添う光源氏の用例を除けばどれも男女の恋の駆け引きの場で使用され、臨終の場に使用されている例は見当たらない。[5] 恋人同士ではなく、親子間で、男女間ではない用例は『源氏物語』中にこの一例しかないということは注目せねばならないだろう。しかも、死者に「添ひ臥す」わけであるから、生者同士の「添ひ臥す」とは明らかに異なる意味合いを持っていると考えられる。また、他作品を確認しても、『今昔物語集』などで死者に生者が「臥す」例が確認できる。これは、「抱き臥す」という語で語られ、男が女に「添ひ臥す」例である。[6] 女が女の死者に、しかも母娘間で「添ひ臥す」例は確認できない。

一条御息所の臨終場面はそう長くは描かれない。しかし、「後れじ」という語、「添ひ臥す」という語、共に特異な使用がされていることは『源氏物語』中の用例を確認しただけでもわかるであろう。なぜこのような特異な表現を使用したのであろうか。類似場面があまりないため、他の用例との比較の中でその意味を見出すことは難しいであろう。そのため、落葉宮の心情を確認していくこととする。

二　母と娘

母一条御息所と落葉宮との母娘関係については、多くの先行研究があるが、もう一度この母娘関係について

確認しておく。

夕霧巻前半において、一条御息所は療養のために小野へ行くこととなる。

御物の怪むつかしとて、とどめたてまつりたまひけれど、いかでか離れたてまつらんと慕ひわたりたまへるを、人に移り散るを怖ぢて、すこしの隔てばかりに、あなたには渡したてまつりたまはず。

（夕霧④三九八～三九九）

一条御息所は、「御物の怪」が落葉宮に憑くことを恐れ、京に残るように伝える。しかし、「いかでか離れたてまつらんと慕」って、落葉宮は母を追って小野へ行くのであった。二人は小野で、間に「すこしの隔て」を置き、「あなたには渡したてまつりたまはず」と、一条御息所は娘が自分に近付くことを許さない。しかし、落葉宮はその心配の言葉に耳を傾けない。彼女にとっては、物の怪に憑かれ病にかかることよりも、母と離れることの方が恐ろしいことなのである。その他にも、一条御息所の死後、「故上おはせましかば、いかに心づきなしと思しながらも罪を隠いたまはましと思ひ出でたまふに」（夕霧④四八七）と、亡き母がいたら自分をかばってくれたのにと思い涙を流す場面もある。一緒にいたいという思い、母が居てくれたらという回想、これらを通し落葉宮の母への強い依存を読み解くことができよう。

また、「親子の御仲と聞こゆる中にも、つゆ隔てずぞ思ひかはしたまへる」（夕霧④四一四）と何でも話をする仲であることが強調され、「よその人は漏り聞けども親に隠すたぐひこそは昔の物語にもあめれど、さはた思されず」（夕霧④四一四）と落葉宮自身が一条御息所との間に隠し事は一切しないと思っていることが語られる。[7] しかも、一条御息所も「『かかることなむ聞きつる、いかなりしことぞ。などかおのれには、さなん、かくなむとは聞かせたまはざりける。さしもあらじと思ひながら』とのたまへば」（夕霧④四一九）と落葉宮

は自分に隠し事はしないだろうと考えている。二人の間には何一つ隠し事がなかったのであろう。二人は常に同じ考え、同じ記憶を共有していたのではないだろうか。鈴木裕子は娘の意志を他者に表現する代弁者としての母の存在を指摘する。[8] いつしか母娘の思いは共有され、同一人物であるかのように人生を歩んでいたのではないだろうか。その思いは次の場面から読み解くことができる。

「みづから聞こえたまはざめるかたはらいたさに代はりはべるべきを、いと恐しきまでものしたまふめりしを見あつかひはべりしほどに、いとどあるかなきかの心地になりてなん、え聞こえぬ」とあれば

（夕霧④四〇一）

夕霧が小野に会いに来た時、その面会を拒絶する落葉宮の返答である。病に苦しむ母一条御息所を介抱していた自分自身も体調が悪くなったと夕霧に話す。これに対し夕霧は「心苦しき御なやみを、身に代ふばかり嘆ききこえさせはべるも、何のゆゑにか」（夕霧④四〇一）と疑問を投げかける。この際に使用される「身に代ふ」という表現は注目しても良いであろう。母の苦しみを自分のことのように受け止める、そんな落葉宮の姿が見える。もちろんこの落葉宮の言葉は夕霧に直接会わないための言い訳である。しかし、この言い訳に母と同じ身体苦痛の共有、つまり一体化した苦しみを利用する意味を考えねばなるまい。[9]

夕霧への対面は「例の、御息所対面したまひて」（横笛④三五二）と常に一条御息所が行ってきた。それが病により叶わなくなり、落葉宮が対応することとなる。落葉宮は「年ごろもむげに見知りたまはぬにはあらねど、知らぬ顔にのみもてなしたまへる」（夕霧④四〇三）と、夕霧の思慕の情をうすうす勘付きながらも知らぬふりをしていた。それが二人で対面するとなると、その思慕の情を訴えられる可能性がある。それを防ぐための手段が、母の「身に代ふ」ことだった。先に確認したように、落葉宮は母に庇護され、依存し生きてきた。

その守ってくれる母が消えた今、自分で我が身を守る術が彼女にはわからず、自らが母と一体化することで自分を守ろうとしたのではないだろうか。そして、彼女の母との一体化は次のような形で確認できる。

宮をば、「なほ渡らせたまひね」と、人々聞こゆれど、御身のうきままに、後れきこえじと思せば、つと添ひたまへり。　（夕霧④四二六）

落葉宮は自らの身の上の情けなさを思い、一人残されるのは嫌であると思い、病に苦しむ一条御息所に「つと添」うのである。一条御息所の病は重く、死をも覚悟せねばならぬ状況である。この母に「後れきこえじ」というのであるから、彼女はまさに「死」を願っていたといえよう。母と同じように、自らも死にたいという願望が見える。

また、この場面は一条御息所の臨終場面と重なってくる。再掲となるが、ここに引用しよう。

宮は後れじと思し入りて、つと添ひ臥したまへり。人々参りて、「今は言ふかひなし。いとかう思すとも、限りある道は帰りおはすべきことにもあらず。慕ひきこえたまふとも、いかでか御心にはかなふべき」と、さらなくことわりを聞こえて、「いとゆゆしう。亡き御ためにも罪深きわざなり。今は避らせたまへ」と、引き動かいたてまつれど、すくみたるやうにて、ものもおぼえたまはず。修法の壇こぼちてほろほろと出づるに、さるべきかぎりかたへこそ立ちとまれ、今は限りのさまいと悲しう心細し。　（夕霧④四三八）

母に「後れじ」と「思」うこと、「つと添」うこと、周囲の者が二人を離そうとしていることが一致している。この二つの場面を重ねて考えるならば、落葉宮が死後の母に「添ひ臥す」理由は、一人取り残されたくないという思いからであろう。そして、危篤状態とも思える一条御息所に取り残されないということは母と同じように死ぬことを意味する。最初は「添ふ」だけであったが、臨終後には「添ひ臥す」ようになる。母と同じ

ように横たわり、しかも、互いが溶け合い混ざり合えるかのようにくっついて、自らも死ぬことを望むのである。彼女の心にある思いは、死者と一体化し、自らも死ぬことであったに違いない。

その思いを汲み取るかのように、一条御息所の死後、落葉宮は小少将の口から「ただ今は、亡き人と異ならぬ御ありさまにてなむ」（夕霧④四四一）と語られる。もちろん悲しみの余り「亡き人」のようになっているという意であろう。だが、死んだ母の身体と同じように「亡き人」のようになっているとも解釈できないであろうか。この「亡き人と異ならぬ御ありさま」は、「聞こえやるべき方もなきを。いますこしみづからも思ひのどめ、またしづまりたまひなむに参り来む」（夕霧④四四一～四四二）と夕霧を遠ざけることに成功する。言い訳同様に、自らの身を守るための手段として、母と一体化することが落葉宮にはあったと考えられよう。

三　一体化、そして崩壊

だが、どんなに母一条御息所との一体化を落葉宮が願ってもその願いは叶うことがない。「骸（から）をだにしばし見たてまつらむとて、宮は惜しみきこえたまひけれど」（夕霧④四三九）と無常にも葬送の準備は整えられ、火葬されてしまうのであった。

なごりだになくあさましきことと、宮は臥しまろびたまへどかひなし。親と聞こゆとも、いとかくはならはすまじきものなりけり。見たてまつる人々も、この御事を、また、ゆゆしう嘆ききこゆ。（夕霧④四四三）

火葬された一条御息所の骸は跡形もなく消え去った。「添ひ臥」していた骸は、もう少し見ていたいと思った骸はなくなってしまったのである。母の骸に「添ひ臥す」ことで一体化しようとしていた落葉宮にとって、

一体化すべき対象がなくなってしまったともいえるのかもしれない。だが、落葉宮は別の物の中に母を見出そうとしていく。

のぼりにし峰の煙にたちまじり思はぬかたになびかずもがな　（夕霧④四六三～四六四）

母の煙と「たちまじり」たい、つまり一緒になりたいと思うのである。骸がなくなった後も、彼女は母への同化の願いは途切れることがない。もっとも、この「煙」を死者に見立て、慕うことは哀傷歌の常套表現であり、他の場面でも確認ができる。

限りあれば、例の作法にをさめたてまつるを、母北の方、同じ煙にのぼりなむと泣きこがれたまひて、御送りの女房の車に慕ひ乗りたまひて　（桐壺①二四）

泣きまどひて、「煙にたぐひて慕ひ参りなん」と言ふ。　（夕顔①一七九）

桐壺更衣の母北の方と夕顔付きの右近の言葉である。共に同じ煙になってしまいたい、という残された生者の悲しみを表現している。だが、それは決して叶わない願いである。「泣きこがれ」ても死者に触れることもできない。火葬された「骸」は「灰」となり、もう人の形をしていない。「同じ煙」になることを願いながらも、同じになれないことを強く感じさせる、死者との別離の表現として「煙」があるといえよう。

だからこそ、同じ同化願望でも落葉宮の「添ひ臥す」という行為はますます異常性を帯びてくる。なぜ、『源氏物語』はわざわざ骸に「添ひ臥す」落葉宮を描いたのであろうか。それは、落葉宮の守りたい、母から庇護されていたものがまさに自らの「身体」だったからではないだろうか。

時が過ぎ、落葉宮は母の「骸」と一体化することを諦め、同じ煙になりたいと願い始める。先に確認したように、同じ煙になるということは死者との別離を意味する。それに呼応するかのように、物語は「亡き人」と

の一体化は全く意味をなさないものとして描き始めてしまう。

「御心ざしまことに長う思されば、今日明日を過ぐして聞こえさせたまへ。なかなかたち返りて、もの思し沈みて、亡き人のやうにてなむ臥させたまひぬる。こしらへきこゆるをもつらしとのみ思されたれば、何ごとも身のためこそはべれ、いとわづらはしう聞こえさせにくくなむ」と言ふ。（中略）

かく心強けれど、今はせかれたまふべきならねば、やがてこの人をひき立てて、推しはかりに入りたまふ。宮はいと心憂く、情なくあはつけき人の心なりけりとねたくつらければ、若々しきやうには言ひ騒ぐともと思して、塗籠に御座一つ敷かせたまて、内より鎖して大殿籠りにけり。　（夕霧④四六六～四六七）

一条の邸へ移り住んだ後、落葉宮は以前同様に「亡き人」と小少将に表現される。前と同じように夕霧を拒絶する落葉宮の態度を示す言葉であった。しかし、それは拒絶の言葉として受け入れられず、「推しはかりに入りたまふ」と夕霧は進入してきてしまう。「骸」と一体化していた時は守られていた身体は、「煙」を求める今、もう母により守られはしない。落葉宮の身体はもう、母とは離れ、自らのものとして動き出し、自分で守るしかない対象となってしまったからである。

そして、落葉宮は「塗籠」に閉じこもることで我が身を守ろうとした。この「塗籠」という場もまた、母へ繋がる場であった。

かばかりになりぬる高き人の、かくまでもすずろに人に見ゆるやうはあらじかしと宿世うく思し屈して、夕つ方ぞ、「なほ渡らせたまへ」とあれば、中の塗籠の戸開けあはせて渡りたまへる。　（夕霧④四二二）

夕霧と落葉宮の噂を心配した母が、娘を自分の元へ呼ぶ場面である。落葉宮は「中の塗籠の戸」を開けて母の元へ向かって行く。橋本ゆかりは「塗籠」を、「落葉の宮が母の胎内に戻る通路であるかのように使われる」

と指摘する。[10] 病で苦しみながらも娘を心配する母、噂に苦しむ娘、この二人を結ぶものがまさにこの「塗籠」だった。[11]

だからこそ、「亡き人」として母が守ってくれず、自ら身を守るしかない落葉宮が最後に籠もったのは「塗籠」だったのではないだろうか。昔母の元へ通じた「塗籠」に閉じこもることで、彼女はもう一度母の守ってくれた身体を取り戻し、過去へ遡ることを願った。母の力で自分を守ってもらおうと、そんな願いをかけて「内より鎖した」のではなかったろうか。

だが、この願いも叶わず、「人通はしたまふ塗籠の北の口より入れたてまつりてけり」（夕霧④四七八）と、小少将の手によって「塗籠」は開け放たれた。もう落葉宮を守ってくれる母はいない。ただ、「単衣の御衣を御髪籠めひきくくみて、たけきこととは音を泣きたまふ」（夕霧④四七九）と、涙することしかできなかった。三田村雅子は男への支配に対する抵抗であり、自らの身体を自身で守ろう、所有しようとする心理を表すしぐさであると指摘する。[12] まさに落葉宮、最後の抵抗であった。

また、彼女の体を包むこの髪は、母を彷彿させるものでもある。

こち渡りたまうし時、御心地の苦しきにも御髪かき撫でつくろひ、下ろしたてまつりたまひしを思し出づるに目も霧りていみじ。（夕霧④四六四）

鈴木温子は、この髪について母の手の温もりを感じ、母を身近に意識し、想い出に浸らせるものであったとする。[13] 母の元へ繋がる塗籠の中で、母を思い出す髪に包まれ、必死に抵抗し、我が身を守る。母の力で、生前のように自分を守ってほしい、そんな思いからの行動だったであろう。しかし、その抵抗は失敗に終わる。この涙は、夕霧に自由にされることへの悔い、そして、もう母に守ってもらえない身の上を知った悲しみの涙だ

ったのかもしれない。

おわりに

落葉宮は母の骸に「添ひ臥す」。亡き母の傍らに横たわり、置いていかないでと懇願したのであろう。もし置いていかれたら自らの意志で夕霧からの恋慕を拒絶することができない、そんな思いからの行動だったのかもしれない。「亡き人」のように過ごし、夕霧を拒み続けた。だが、母の骸も火葬され、一緒にいたはずの骸は煙と化してしまった。母と同じ「亡き人」のふりをしてももう夕霧を拒むことはできない。そして最後、かつて母の元へと繋がった「塗籠」へ一人で閉じこもるのであった。母に守ってほしい、自らを守りたい、そんな願いを持っての行動であったろう。だが、それも失敗に終わり、ただ声をあげて彼女は泣くことしかできない。

この「添ひ臥す」という行為は、落葉宮の母への強い依存を示す語として捉えて間違いないであろう。いつも母の庇護の元に居た落葉宮は、母なしに自らを守ることはできなかった。だからこそ、彼女は死後の母と一体化しようと、「添ひ臥」したのである。母と一体化することで母の庇護する力を身にまとい、落葉宮は夕霧に抵抗するのであった。しかし、「煙」に母を見出し、「身体」による一体化を手放した途端、彼女は我が身を守ることができなくなってしまう。「煙」ではなく、「骸」と一体化することが重要だったのである。

そして、この落葉宮の願望は、宇治十帖の宇治の姉妹へと受け継がれていく。宇治の大君は八宮死後、「骸」に会えないため「添ひ臥す」ことはできない。だが、多くの言葉の中で彼女の父との一体化願望を確認できる。

かの世にさへ妨げきこゆらん罪のほどを、苦しき心地にも、いとど消え入りぬばかりおぼえたまふ。いかで、かのまだ定まりたまはざらむさきに参でて、同じ所にもと聞き臥したまへり。（総角⑤三一一）

父八宮の魂がまださまよっていると阿闍梨に聞き、「同じ所に」と大君は涙する。中君の面倒を見るときには、「親心にかしづきたてて見きこえたまふ」（総角⑤二四三）と自らが親になったかのように話してもいる。もちろん「同じ所」などという言葉は悲しみ表現の常套句であるため、一概に一体化願望があったとはいえない。だが、落葉宮が母の庇護だけを受けて育ったように、宇治の姉妹もまた、八宮だけに守られて育った子供である。

世の常のほどの別れだに、さし当たりては、またたぐひなきやうにのみ皆人の思ひまどふものなめるを、慰む方なげなる御身どもにて、いかやうなる心地どもしたまふらむと思しやりつつ（椎本⑤一九一）

「慰む方なげなる御身」である二人の状況は大変過酷であることは想像に難くない。また、大君が「後らさむと思しけるこそ、いみじくはべれ」（総角⑤三一三）と中君に言われながらも、最後は死んでしまうことを思うと、父の後を追い、大君は死を選んだともいえよう。大君は父八宮と一体化しようとしたのではないだろうか。

『源氏物語』には親を亡くした子は多く描かれる。主人公の光源氏からしてそうである。事実だけに目を向ければ末摘花なども挙げられよう。だが、臨終場面や葬送場面が描かれるのは落葉宮と宇治の姉妹だけである。わざわざ描き出した「死」は物語の中で意味を持ってこよう。[14] もしかしたら「後見」がない姫君を描き、その後につながる物語を紡ぎたかっただけなのかもしれない。親子の死を通し物語が何を描きたいのかについては論を改めることとしたい。

注記

（1）鈴木裕子「苦悩する〈母〉―娘の人生を「所有」する母」（『『源氏物語』を〈母と子〉から読み解く』角川書店・二〇〇五）

（2）大軒史子「落葉の宮」（『別冊国文学　源氏物語必携Ⅱ』学燈社・一九八二）

（3）金賢貞「一条御息所の死についての一考察」（「東アジア日本語教育・日本文化研究」第三号、二〇〇一・三）

（4）小池清治「『源氏物語』を展開させる原動力としての「死」＝『源氏物語』は完結しているという説＝」（「宇都宮大学国際学部研究論集」第九号、二〇〇〇・三）

（5）「添ひ臥す」と似た用例として、「臥す」や「寄り臥す」という語がある。この例に関しても死者の横に臥す例は見当たらない。

（6）『今昔物語集』の巻第十九「参河守大江定基出家語第二」に「久ク葬送スル事無クシテ、抱キ臥タリケルニ」（馬渕和夫・国東文麿・稲垣泰一訳・校注『新編日本古典文学全集　今昔物語集』②四三三頁、小学館、二〇〇〇）という例で確認できる。しかし、「添ひ臥す」という語は使用しておらず、「抱き臥す」という語で表現されている。死者と共に臥すという意では同じため、例として挙げた。

（7）大軒史子論文（注二と同じ）はこの場面から、特異な親子関係を見出せるとする。

（8）注一論文と同じ。

（9）「一体化」という言葉は辞書類では、別々のものが融合することを示す。本論文では、同じ媒体を介して融合することを指す。落葉宮の「添ひ臥す」という行為の特殊性について述べることを目的とするため、「同化」と区別をした。同媒介による融合が「一体化」であり、別媒介による融合を「同化」としている。

（10）橋本ゆかり「『源氏物語』の「塗籠」―落葉の宮の〈本当〉の生成と消滅」（『源氏物語の〈記憶〉』翰林書房、二〇〇八、一〇四ページ）

（11）この「塗籠」については、様々な考察がある。小嶋菜温子は、「ぬりごめの落葉宮―夕霧巻とタブー」（森一郎編

『源氏物語作中人物論集』勉誠社、一九九三）で、開かれるための塗籠の存在を指摘し、そこから「聖所」としての空間を読み解く。また、阿部邦広は「塗籠に籠る、落葉宮」（「物語文学論究」第十一号、二〇〇一・一）で、塗籠は「祖霊」に出逢う場であるとし、そこから落葉宮の塗籠に籠る行為は、母御息所に逢い、あるいは死を願った行為だったかとする。

（12）三田村雅子「黒髪の源氏物語」（『源氏研究』第一号、翰林書房、一九九六・四）

（13）鈴木温子「『源氏物語』「落葉宮」試論―髪と塗籠をめぐって」（「駒沢国文」第三八号、二〇〇一・二）。氏は落葉宮の抵抗の理由に、母そのものとも言える髪に夕霧が手に触れないように抵抗したとする。

（14）明石入道については、恐らく山で死去したものと思われるが、「遺書」だけが残され、骸も葬送も描かれない。そのため、今回の「死」の描写の区分からは外した。

The Ochibanomiya of *Genji-Monogatari* : Integration wish with the dead

SHIOMI, Yû

The death of Ichijomiyasundokoro is drawn in '*Yugiri*' of '*The Tale of Genji*' . Ochibanomiya who is the daughter is in proportion to to the corpse and lies. The meaning of the action is considered. When the relation before mother and daughter's life is read and solved, the appearance of the daughter who depends on mother is clarified. And, Ochibanomiya tries to borrow mother's power to defend an own body when postmortem of mother. It was an act of the accompaniment of the appearance of the wish and lying.

（人文科学研究科日本語日本文学専攻　博士後期課程二年）